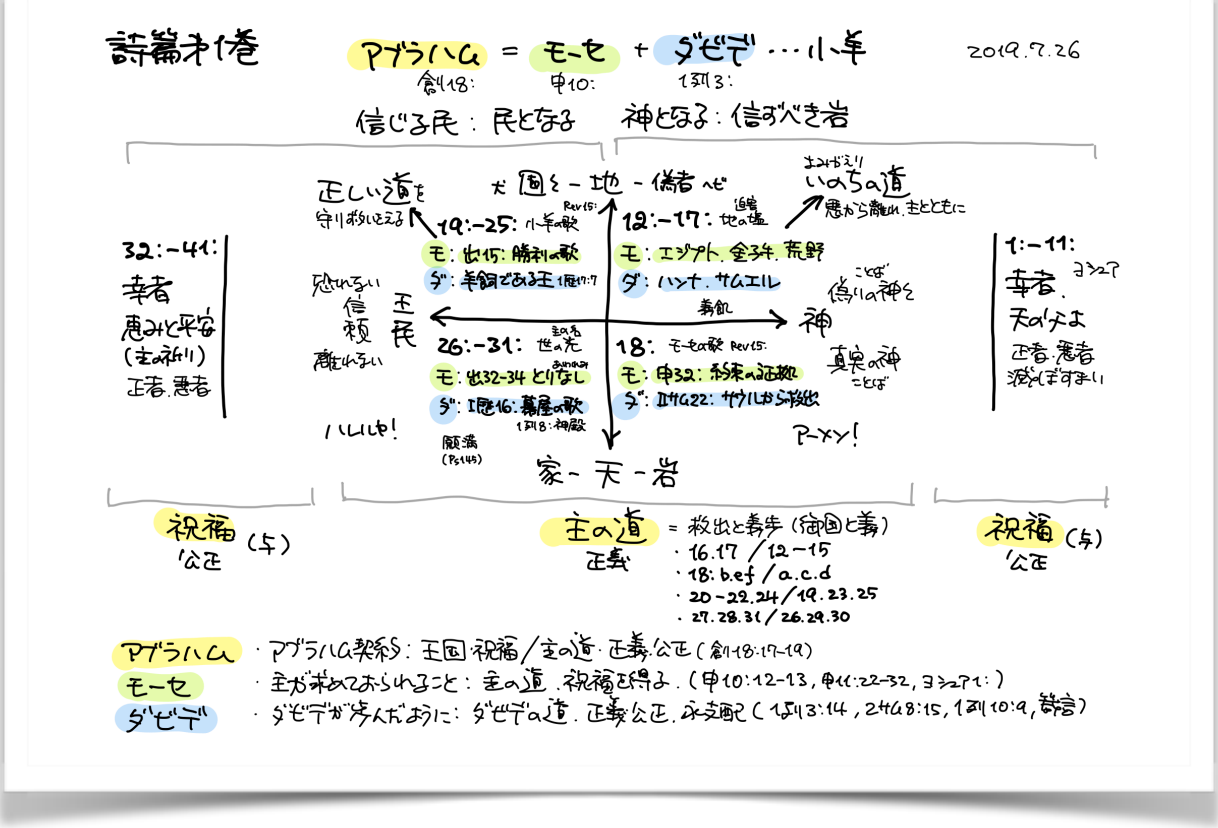
詩篇第一巻

詩篇12-31篇



詩篇の第1巻の第2集と第3集の分析をやっと終わりました。

第1集というのは、1篇から11篇まで。4集が32篇から41篇まで。真ん中に12篇から18篇まで(2集)と、19篇から31篇まで(3集)ということで４つに分かれているという分析でした。

1篇からは「幸いな者よ」、32篇からのところにも「幸いな者よ」という詩篇が集まっていますので、それぞれに正しい者、悪者とさばきがあって、その外側に囲まれた真ん中の部分ということで第2集、第3集を何度もやっていたんですけれど、天と地を表してるんじゃないか。正しく歩むことと救われることなんじゃないかというようなことで分析をしていたのですが、なかなかパチっとはまらなかったですね。

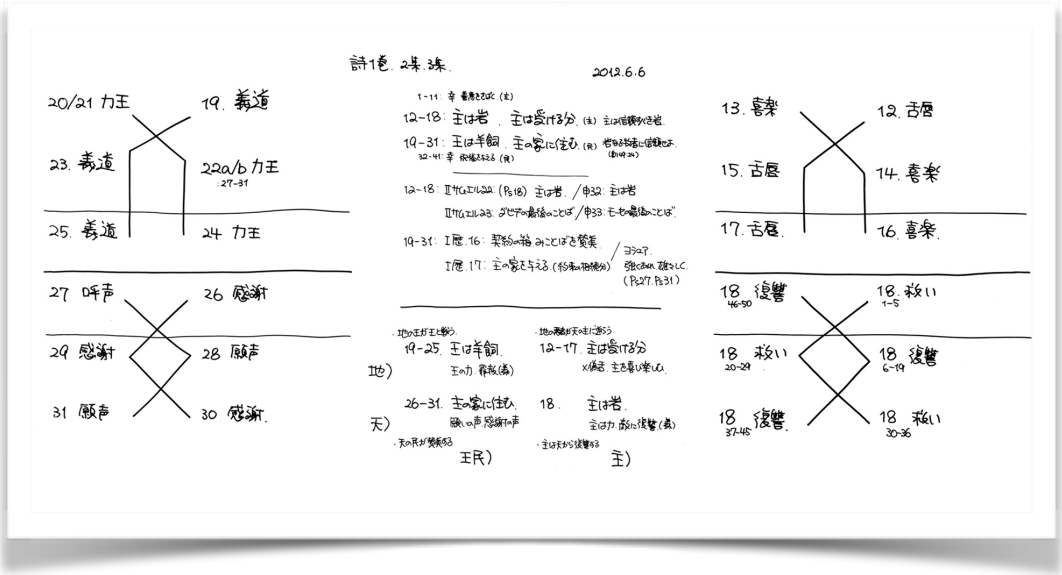
この中(第2集、第3集)の詩篇同士の比較じゃなくて、この外側にある契約の約束とか大切な言い方というようなものに、何かこの真ん中の12篇から31篇までを表すものがあるんじゃないかと想像はしていたんですけど、なかなか見つからなくて苦労していました。

12篇から31篇は4つに分かれます。18篇はひとつではっきりしていますから、この18篇よりも前の部分と後ろの部分ということで分けていました。

この4つ(:12–17，:18，:19-25，:26–21)なのですが、難しくなってしまった理由は、４つに分けた時に、前後、上下、斜めという比較をすれば普通は良いんですが、このそ

れぞれの12から17、19から25、26から31。これが6篇ずつ入っています。6篇ずつ入っているということは、この中それぞれを4つに分ける時に何かもうひとつ、4つに分けるプラスもうひとつのキーワードが必要になってるんじゃないだろうかということで、それぞれが2つに分かれるでしょうということがここに取り出されてますね。

12から15と16、17。これは別の前にやった時にもその並行を見ていました。



これ2012年ですね(別紙)。この4つとこの2つ。くの字で並行している。ここに大切な段落があります。ここに並行があって、ここにそれをまたまとめるような形がありますということなので6篇を分けた時に4つと2つ、4つと2つ。4つと2つというのが、この段落のそれぞれ中にも入っているということなので余計に難しくその並行が見えるということです。

ただ、わかってしまえば複雑ではありますけど、そういう編集が不可能で、これは奇跡的になってるみたいなものじゃないですね。その並行を見て分けようと思えば分けられるというものだと思います。各段落の中はこの2つに分かれている。「救い出される」ことと「義しく歩む」ということが今ここに取り出されています。

全体を見た時に、「幸いな者よ」で囲まれて真ん中にあるものということだったのですが、これはアブラハムの契約の約束に従って配置されているのであろうということです。

特に、創世記18章ですね。18章はソドムとゴモラが滅ぼされるという箇所です。ソドムとゴモラが滅ぼされるという箇所の出だしにこういうのがあります。「私のしようとすることはアブラハムに隠して良いのであろうかと。アブラハムは必ず大いなる強い国民となって地のすべての民が彼によって祝福を受ける。大いなる国民なって祝福を受けるとそのために私は彼が後の子らと家族とに命じて、主の道を守らせ、正義と公正を行わせるために彼を選んだ。彼を知ったのである。」という言い方が、ここ(18章)にあります。主の道を守らせる。主の道というのは正しい道、裁きの道。その道を守らせることによって全世界がアブラハムによって祝福される。アブラハムを祝福する者を祝福するという約束です。アブラハムの契約の特に18章の約束が、この全体の枠組みを決めているものだろうと。この約束を与えられた後にアブラハムは「ちょっと待ってください。正しい者と悪者を一緒に滅ぼされるのですか」と。「50人いたら…」「45人いたら…」というその箇所です。

「正しい者と悪者を一緒にすることは、全地を裁く公正な神様としてふさわしくないですよね」ということを訴えて、そのとりなしの祈りによって兄弟であるロトが救われていくということなのですけども、その箇所で出ている主の道を守らせ正義と公義を行わせる。公道とか公義とか書いてあるのは裁きを行わせるということですね。正しい裁き、正しく歩み、正しくさばくということをアブラハムを通して行う。アブラハムはそれを分かっていますので、アブラハムはその正しいということを表すのですけど、憐みという言葉で言い換えることができる。それがアブラハムが選ばれている。主の名を表す憐れみの父であるということがこういうところからもわかるものだと思うのですが、主の道を守らせて祝福となるということの、主の道について教えているのが12篇から31篇の段落でしょう。

その正義と公義を行うということを見て考えないといけないのですけど、正しいといっても似ているような言葉が、ストロング番号だと似ているのですね。ツァデク、ツァディック、ツェデクみたいに。正義、正しいもの、義のように訳されたりしますね。あと正しい道というのは、まっすぐな道という、正しい、正しくてすぐであるみたいな事も言われますね。こういうのが、正しいグループ。全き道、完全な道、それも正しいというものに言われてるものですね。グループになってるもの。それを見なきゃいけないと。

それで見ていくと、全き道、全き道。いろんなノアのところから始まって、全き道がありますね。その道を守る。正義と公正というと申命記にも出てきますし、ダビデについて言われるサムエル記8章。ソロモンが正義と公正を行っているというのをシェバの女王が見て驚くという箇所も正義と公正と同じことですので、ずっとアブラハムの契約を覚えてモーセの律法、そしてダビデが王となって支配する。そして、その後に来るメサイアは正義と公正を行うというのがイザヤ9章、平和の君のところにありますけれども、そのような正義と公正と言われる時にはアブラハムの約束から始まってるというものだと思います。

そのアブラハムの約束を信じている。その約束が主は盾である。信頼しなさい。主は盾であるということですね。主は盾であるということと、主は岩はであるということが名前がいろいろリストされてますからそこでも分かるかと思いますけども、揺るがないもの、守ってくれるものという言い方で出てきますので、主に信頼するストーリーというのも18篇のあたりにもあります。岩というテーマが出てきますけれども、その正しい裁きの主に信頼するというようなことがアブラハムの契約の約束のところに入っている。

それが分かっていてモーセが申命記で話すところで「主が求めておられることは何なのか」という箇所があります。「イスラエルよ、今あなたがたの神、主があなたに求めることは何なのか。これだけだ。すなわち、あなたの神、主を恐れその全ての道に歩み、主を愛し心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、主に仕え、また私が今日あなたに命じる主の命令と定めとを守って幸いを得ることである。」主が求めておられることは、主の道を歩む。そして幸いを得る、祝福を得るということであるというのは、ただそれを求めていると申命記10章で言われます。

ダビデが今度ソロモンにその王座の祝福、新しい王としてソロモンを選んだ時にも神様が言うわけです。ダビデもソロモンに言います。「モーセの道に歩みなさい。王座につく時に、ダビデの歩んだように、その道を歩むなら、正義と公正を行うならば支配は世々限りなく続きます」というこのアブラハム、そしてモーセに現れ、モーセの約束に現れ、ダビデの約束に現れ、この正しい道、主の道に歩むということを4つの大きな段

落そして2つの対の構成によって教えてくれているというのが12篇から31篇ということになると思います。

それでその公正で考えた時に12篇から17篇、その前にこちらですね。18篇は第2サムエル22章にそのまま入っていますので、これはダビデのその出来事の背景があるということがはっきりしている詩篇です。

詩篇に題がついていますけれど、全てがそういう題とは限りません。違うものもたくさんあるんじゃないかと思います。聖書だと小さい文字で書いてあって、本文に入ってなかったりしますが、この18篇の題は本文に入っているものですので、これは正確です。

その題が、もし付いてなかったとしたら、18篇を見たら、これはエジプトから連れ出された話なのかと思うような詩篇ですけれど、これはサウルから連れ出された救い出された時にとわざわざ書いてあります。ダビデが死ぬ前の言葉の箇所に編集されてるんですよね。死ぬ前の22章、そして23章が死ぬ前の祝福の言葉。まるで申命記32章と33章のように、モーセの最後の約束の言葉のような形で書かれているということで、この18篇がここにあります。

それで、その箇所と比べて考えた時に12篇から17篇はどういう状態、背景があるんだろうかということなんですが、サムエル記22章なので、23章かなとかずっと思ったり、ちょっと探せていませんでした。でも23章は「幸い」だしと思っていたのですが、12篇から17篇を見ると、これはハンナの時代、サムエルの時代、ダビデの前の時代です。サウルの前の時代。神様から離れてしまっているイスラエルの状態を歌っているのではないかと思われます。サムエル記自体がハンナの歌で始まってハンナの歌と18篇は似ているところがたくさんあります。ダビデはそのハンナの歌の成就ですということが分かっているような感じで歌ってますよね。12篇から17篇の中にハンナの歌を連想するところも入っています。

17篇の10節。17篇の14節から。このへんがハンナの歌を連想するところです。その時の腐ってしまっている祭司たち、裁き人たちということがこの12篇から17篇までの問題になってるんじゃないかということで、ここ(12-17)はハンナ、サムエル。ここ(18)はサウルから連れ出された後のダビデ。そう考えると、じゃあダビデという観点で19篇から、26篇からはどういうつながりなんだろうということを考えて、こちらが先でしたね。26篇から31篇。

これは、感謝とか褒め歌を歌うというようなことがよく出てくる。栄光を歌う。それと家に住みたいというようなことが出てきます。そうやって見てくると、この29篇の1、2節にあるところですね。主に帰せよ。主に帰せよ。これは96篇なのです。96篇というのは第1歴代誌の16章で引用されている。もしくは逆。16章を96篇で引用しているという箇所なんですけど、天幕が、ダビデの幕屋が完成してその主の家を喜び歌うという箇所ですので、その観点で一緒に見るというと、なるほど、この主のみ顔に顔を向けてくれるとか願いの声を聞いてくれるとかいうと主の神殿ですね。はっきりとわかるのは、第1列王記8章でソロモンが神殿を捧げる時に願いの声を聞く、御顔を向けてください。その栄光の御名、御名を表してくださいということがたくさん出てくるところですので、憐れむ、とりなすというような歌。これがダビデの幕屋を捧げているという目的になるかと思いますので、これはダビデ的には第1歴代誌16章の幕屋の歌。そして、それに続くソロモンの神殿という生贄を捧げて憐れみを求める場所について歌っているというのが26篇から31篇。

残っている19篇から25篇は何でしょうということなのですけれど、19篇から25篇の、20篇、21篇、22篇、24篇というところを見ると王様の勝利。神様に信頼している油注がれた者が勝利をおさめる。

22篇も前半の捨てられたのかという十字架上の祈りですから、思い出すところだと思うんですけども、22篇の後半は主が勝利を収めるという箇所ですね。24篇はその栄光の王が入ってくるという箇所でこういうところを見ると、23篇は牧者です。

22篇は牧者とは書いていないけど、この攻撃してる犬が、攻撃してるのは羊です。王様は羊飼いですから。牧者である王様が民を導くということですね。

23篇は牧者ですということなんですが、25篇は罪を許してください。正しい道に導いてくださいというところだけをずっと見ていると個人的に歌ってるようにも見えますけれど、よく見てくださいということなんですが、「敵が迫っている。イスラエルを贖ってください」ということを言ってますから、これは王様が罪を悔い改めているということだと思われます。へりくだる者と言った時には、このモーセを思い出すところですね。

この19篇から25篇の中にヤコブ、イスラエル、ヤコブの神。ヤコブ、イスラエルという契約の民についての言い方もたくさん出てきますので、羊飼いである王様ダビデが民を導いてるということで第1歴代誌16章の後です。17章のところで「あなたを羊の牧場から連れ出しました。」家を建てたいと願ったところですね。ナタンが預言で答えるところですけども、家を建てたいと言ったところで答えて下さっているダビデに答えてくださるところの最初で万軍の主はこう仰せられる。「私はあなたを羊の群れを追う牧場から取り、私の民イスラエルの君主とした。」羊の牧者としましたというところから始まっていますので、羊飼いであるダビデ王。その勝利ということが言えるところなんだろうということで、このダビデの歴史的な背景から考えると、そういうような状態、背景があるんだろうと思われます。

モーセの観点で見た時にどうなるんだろうと。申命記32章、これはそのまま18篇と直接連携してるものですね。ですから、主は岩だという最初の詩篇ということも言えるぐらいの岩の詩篇ですね。32章の3節から4節、このあたりが18篇にそのまま引用されているというところを見ても、32章というところは18篇の背景にあるものと言えるだろうと。

ダビデの第2サムエル22章、これはダビデの歴史のストーリーの最後に書かれている2つの詩の1つです。申命記32章もモーセの人生の最後に書かれている2つの詩の最初のほうです。ですから、位置付けとしても似ている。主は岩であるという詩篇です。

さてさて、他の所はどうなってるんだろうかとみると、まずこの12篇から17篇はエジプトで救われる前の偶像礼拝をしているイスラエルの人たち、荒野で偶像礼拝をしている人たち、金の子牛を礼拝する人たちということで、ダビデの時のハンナ、サムエルの時のように、神様から離れて偶像礼拝をしている民というのがその詩篇の背景として考えられるのではないかということでそれを見ました。

預言者の言葉を聞かない、主の声を聞かない偽りの言葉に惑わされている。偶像礼拝している。預言者を迫害している。モーセが来たのにモーセを嫌う。

そういうような時代の状態として、この12篇から17篇がモーセの時代として見ることができるだろうと。

19篇から25篇は、これが意外と、出エジプト記の15章。エジプトから連れ出された時の歌。戦車、馬を誇る。右の手の勝利。他にも幾つもありましたね。伴って導いてくれる。他にもありましたけど。出エジプト記15章、救い出された時に、主の栄光が現されるというようなこともありました。私の栄光を現そうということがありました。エジプトから連れ出して、エジプト軍を倒しましたという出エジプトの15章は、特にこの19篇から25篇のの背景にあるであろうというふうに今回見直しました…となると、この最後の26篇から31篇は、特に多い言葉が憐み、憐れんでください、主により頼んで憐れんでください、聞いてください、助けてください、答えてくださいというようなことがずっと書かれている。主の家に住みたいということを言っているんですけれど、その憐れみを求めているというのは主の名の宣言がされている出エジプト記34章。32章から金の子牛の話がありました。そのことに対して、憐れみますということを約束してくださったとりなしの祈りですね。モーセがとりなして憐れみを求めて神様が憐れんでくださった。その主の名の栄光が現されたという出来事は、特にここの時を表してるんじゃないかと。このあと出エジプト記の35章から幕屋が作られます。幕屋の作り方と幕屋が作られる間の話です。この幕屋が何のためなのかということがこの出来事によって、もっとはっきりと表されているような段落ということでこのモーセの観点で、この25篇から31篇を見ると、出エジプト記のところが特に思い出さなければいけないもののように見えます。

このアブラハムの契約の約束がモーセ、そしてダビデを通して成就していますよ。それが主の道ですよということを表しています。そしてこの4つを比べてみると12篇から18篇。これはここですね1篇からのところ。1篇から11篇までも含めて神様側の話をしています。神となる。神である。主が主である。

後半19篇からと32篇からもそうなんですけど、こちらは民側ですね。信頼して恐れない。神様から離れない。こういう民となるという話が後半に、この2つが分かれるんじゃないかと。

上と下。 12篇から、19篇からのところ(上)は、地での戦いという感じ、地で偽りものと戦う。偽物、偶像と戦う。偶像の国々と戦う。パロと戦う時も礼拝の戦いと力の戦いがありましたね。偽り者と戦うほうは蛇と戦う。犬と戦う。とこちらは鳥なんでしょうか。こっちが羊？この地での戦いがありますね。それに対して(下は)主の道は天の道だということですね。天から裁きをします。天に私たちの住まいがあると。それを求めてるという天に家があるというのが、26篇から31篇ということで天の岩、天の家、地の敵との戦い。a(12-17)、b(19-25)、a(18)、b(26-31)の違いがあるだろうと。

神様側と民側でいうと神様に信頼する真実の言葉である。偽りの言葉、偽りの神々と戦っている。偽りの言葉の神々。真実の言葉の神ということで舌とか口とかいうのがよく出てきます。

こちら側(19-25)(26-31)は民の方ですから恐れない。国々を恐れない。神様から離れないというのがこの信頼している行動のような形になるかと思います。

クロスしている「言葉の戦い」がここ(12-17)とここ(26-31)にあります。こちら(12-17)は「偽りの舌」です。

こちら(26-31)は感謝と賛美の唇ということですから、こちら(12-17)は迫害されて義のために義のために迫害されている。義に飢え乾いてる者たち。地の塩である迫害を受けている者に対して、(26-31は)勝利が与えられますので、世の光となる。主の名の栄光が現される。願いが満たされる。飢えてることに対して満たされてる。願いを聞いてく

ださい。聞いてくださいと言っていましたけど、願いが満たされるというのが145篇にあるようにお腹がいっぱいになるものの一番は、願いが満たされるということだということも分かると思います。それが神殿に行く目的です。これはよみがえり、命を求めている命への道の話。主とともにいる。悪から離れて神様と共にいるよみがえりの道の話。

こちら(18)(19-25)は正しい道を守って救われるという正しい道というのが18篇、19篇から25篇というような主の道の二つの面とやることと行く場所みたいな感じですかね。ということでここにあるのじゃないでしょうか。

こちら(12-17)(18)がアーメン。(19-25)(26-31)ハレルヤ。真実、そして褒め称えますという戦いの歌の言葉としても言えるものだろうと思います。

この中それぞれに二つずつありますというのがここに書いてありますけど、「救い出されること」と「義しく歩みなさい」。これを別の言い方で言うと「御国と義を第一に求めなさい」と言われているようなものだと思います。

主の道というのは、御国と義を第一に求める道。そうすればすべて与えられます。

地の塩、世の光という山上の説教の中で言われている義のために迫害されてる者は必ずよみがえって祝福されるということもこの中に書かれていると思いますので、新しい子羊が山に登って教えている山上の説教を思い出さなきゃいけないですね。「幸いな者よ」で始まっていますから。その中の主の道についての教えというものも、山上の説教と一緒に見ることができるんだと思います。

黙示録の15章に歌として書いてあるものの最後のところにこういう箇所があります。「神のしもべモーセの歌と子羊の歌。主のみわざは驚くべきもの。道は正しく真実です。

御名は聖でその前にすべての国々が伏し拝みます」という箇所があります。このモーセの歌と子羊の歌とこの3節のほうはモーセの歌で4節は子羊の歌のようにも見えます。

3節のほうは18篇の中に入っています。22篇を要約すると4節のこの子羊の歌のように見えます。御名が褒め称えられるようになって、国々が来てあなたの前に伏し拝み、全世界がその裁き、救いのわざを宣べ伝える。正しい裁き、主が成した義が告げ知らされるという意味で、この子羊の歌と言ってる時に22篇は、想定されているものだろうと思いますけれど、こっち(18)がモーセの歌で、子羊の歌(19-25)ということも黙示録で言われているその歌が、この2つでもっと詳しく説明されてることになるかと思いますけれど、「主の道が、主の正しい裁きがなされたハレルヤ」いう黙示録の歌がこういうところから来てるのはふさわしいと思います。

第1巻の12から31までのところを中心に見てみて、このアブラハムの契約、モーセとダビデを通して成就していると。主は岩であるということがいろんな観点で教えられているというのが、ここの構造になってるんだろうと思われます。